長野県短期大学紀要　第55号　71-81頁　2000年12月
Journal of Nagano Prefectural College, No. 55, pp. 71-81, December 2000

19世紀初頭のドイツにおけるペスタロッチ主義音楽教育の受容

関口博子*

はじめに

ペスタロッチ主義音楽教育は，ペスタロッチ（Johann Heinrich Pestalozzi, 1746-1827）の直観教授や段階教授といったメトーデを音楽に適用させた教育である。それは，1810年にスイスのチューリッヒで出版されたネーゲリ（Hans Georg Nägeli, 1773-1836）とプファイファー（Michael Traugott Pfeiffer, 1771-1849）共著の『ペスタロッチの原理による唱歌教育論』（Gesangbildungslehre nach Pestalozzischen Grundsätzen）――以下，『唱歌教育論』と略称[1]――を契機として，各国への普及を果たしている。なかでも，最も早い時期にペスタロッチ主義音楽教育が受容されたのが，プロイセンを中心とするドイツである。ドイツでは，『唱歌教育論』の出版と相前後して，数多くのペスタロッチ主義による唱歌教本が出版されている。特に，ナトルプ（Bernhard Christoph Ludwig Natorp, 1774-1846）の『民衆学校の教師のための唱歌指導の手引き』（Anleitung zur Unterweisung im Singen für Lehrer in Volksschulen, 2Bde., 1813/1820）は，その第1巻が5年間で3,400部販売され[2]，最終的には第5版まで出版されて5,000部から7,000部は売れたであろうといわれる[3]ほど広く普及した。一方，ペスタロッチ主義音楽教育の発祥の地ともいえるスイスでは，『唱歌教育論』出版直後の1810年代には，ペスタロッチのイヴェルドンの学園などは別として，一般の学校にはまだ，ペスタロッチ主義音楽教育受容の形跡は，ほとんど見出だせない[4]。

ではなぜ，ドイツでは，スイスよりもきわめて早い時期にペスタロッチ主義音楽教育が受容されたのであろうか。そのことについて考察するに当たっては，当時のドイツの音楽教育について踏まえると同時に，当時のドイツの社会状況や教育状況等も視野に入れなければならないであろう。特に注目しなければならないのは，プロイセン教育改革である。『唱歌教育論』出版直後の1810年代前半のプロイセンは，まさにちょうど教育改革期に当たり，ツェラー（Carl August Zeller, 1774-1846）やナトルプなど，教育改革に直接的に携わった教育家達が，プロイセンの学校教育へのペスタロッチ主義音楽教育の導入の推進に重要な役割を果たしている。ザイファルト（L. W. Seyffarth），ティーレ（Gunnar Thiele），ヴィーネケ（Friedrich Wienecke）らの研究[5]をはじめ，我が国でも大崎氏の研究[6]など，すでに数多くの先行研究において，プロイセン教育改革期にペスタロッチ主義の教授法が学校教育に導入されたことが取り上げられているが，これらの先行研究では，音楽（唱歌）のことにはきわめてわずかしか触れられていない。一方，音楽教育史の先行研究では，反対に，プロイセン教育改革のことにはほとんど触れられていないのである[7]。

よって，本稿では，ドイツにペスタロッチ主義音楽教育が受容された経緯をたどりながら，プロイセン教育改革を中心に，19世紀初頭のドイツにおける社会状況，教育状況等も視野に入れ，なぜ，

*〒380-8525　長野市三輪8-49-7　長野県短期大学
*Nagano Prefectural College, 8-49-7 Miwa, Nagano 380-8525, Japan.

ドイツにおいてきわめて早い時期にペスタロッチ主義音楽教育が受容されたのか，その要因について考察する。

1．1800年前後のドイツにおける学校音楽教育

(1) 18世紀末の民衆学校における音楽教育の状況

民衆学校における音楽教育は，宗教教育の一環であり，公式礼拝で歌うコラールを覚えさせるために欠かせないものであるとして重視されてきた。そのことは，例えば，1794年に公布された『農村学校と下級都市学校の教師に対する指令』(Anweisung für die Schullehrer in den Land- und niederen Stadtschulen) において，「授業は唱歌と祈りで始まる。終わりも同様である」[8]と規定し，さらに唱歌教授に対して細かい指示を与えていることからもうかがえる。しかし，18世紀末の民衆学校における音楽教育の実態は，決して満足のいくものではなかったようである。学校で取り上げられたのは，ほとんどの場合，教会で歌うのに必要なコラールだけであり，まず教師がコラールのメロディーを歌い，それを生徒が聴いて模倣するという方法であった。教師になるにあたっては，「彼ら［教員の志願者——引用者］の音楽的な能力は，…（中略）…ほとんど専門家達によって調べられたり評価されたりすることはなかった」[9]ので，多くの教師が，非常に短いメロディーさえ，楽譜を見ながら歌うことができなかったという状況であった[10]。実際に教師達は，大きな声で歌えればそれでよいとされており[11]，生徒達は，引きずるような，叫ぶようなひどい声で単調に歌っていて，しかも授業のはじめと終わりに歌うそのような歌は，もはや子ども達の大騒ぎをしずめるのに役立てられただけだったとされている[12]。

(2) 1800年前後のドイツにおけるペスタロッチのメトーデの音楽教育への適用試論

このように，民衆学校の音楽教育は低迷していたが，その一方で，1800年前後から，ペスタロッチのメトーデを音楽教育に適用させようという試みも出てきていた。その意味で端緒となったのは，『一般音楽新聞』(Allgemeine musikalische Zeitung) に掲載されたホルスティヒ (Horstig) とクライン (C. B. Klein, 1754-1825) の論文である。ホルスティヒは，まず，聴唱から始めるが，それにとどまらず，ソルフェージュを一通り終えたら，音楽の基礎理論や和声法を教え，さらに能力のある者や希望する者に対して，高度な演奏論などを教えるよう指示している[13]。クラインも，まず聴唱からはじめ，音階唱，母音唱，リズム，カノン唱へと進み，最終段階に器楽と作曲の指導をあげている[14]。

『唱歌教育論』出版以前に出されたもののなかで最も重要なのは，同誌に1805年に掲載されたリントナー (Friedrich Wilhelm Lindner) の論文[15]であろう。リントナーは，ライプツィヒの市民学校の教師であり，そこでの実践報告を同誌に掲載したのであった。彼の方法は，まず，聴唱でオクターヴを歌うことからはじめ，音階唱へと進み，完全に聴覚とのどを訓練する。その後で，楽譜を導入し，視唱へと導き，2声の歌を歌えるようにする，というものであった。彼の方法は，ペスタロッチが言語教授の前提としていた発声器官と聴覚の育成の方法を唱歌教授に結び付けたものとみられる。リントナーは，ペスタロッチの直接的な協力者ではなかったが，注目すべきは，彼が1806年にペスタロッチに宛てた書簡がもととなり，彼の方法が，イヴェルドンの学園で導入されたことである[16]。リントナーは，ペスタロッチの名においてニーデラー (Johannes Niederer, 1779-1843) が書いた評価を根拠に，自らの方法が，「ペスタロッチの理念を唱歌に適用した最初の試みである」[17]と表明した。実際には，ホルスティヒやクラインなど，ペスタロッチのメトーデの影

響がみられる方法は，リントナー以前から存在していたが，この表明がネーゲリ，プファイファーの『唱歌教育論』出版直後の1811年に出されたことからみて，リントナーは，この表明によって，自らの方法が，ネーゲリらよりも早くペスタロッチのメトーデを適用したものであることを示したかったものと思われる。

以上のことから明らかな通り，すでにドイツでは，ネーゲリやプファイファーがペスタロッチ主義の方法を考案するよりも前から，ペスタロッチのメトーデを音楽教育に適用させた方法が発表されていた。それらの方法は，特にペスタロッチの段階教授法から大きな影響を受けていることがうかがえるが，『唱歌教育論』やその出版後に出された唱歌教本のように，音楽をリュトミーク（Rythmik，リズム法），メローディク（Melodik，旋律法），ディナーミク（Dynamik，強弱法）などというように，要素に還元するということはしていない。それが，1800年頃に出されたペスタロッチ主義の唱歌教授法と，『唱歌教育論』出版以降の方法との大きな相違であると言える。しかしそれらの方法は，自らの実践報告や唱歌教育改善のための一つの提案という範囲にとどまっており，提案者とその周囲で個々バラバラに実践されただけで，広範囲に影響を及ぼしたとはとても言い難い。多数の民衆学校では，依然として19世紀に入っても，コラールの聴唱に終始していたものと思われる。

2．プロイセン教育改革の始動とツェラーの活動

（1） 改革の始動と音楽教育

1806年のイエナ＝アウエルシュテットでの軍事的敗北を契機として始まったいわゆる「シュタイン・ハルデンベルクの改革」において，教育改革も着手されることとなった。これにより，旧態依然としていた民衆学校の音楽教育も，改革が志向されたのである。公的な立場からその契機を与えたものは，1809年にプロイセン政府の宗務・公教育局長官となったフンボルト（Wilhelm von Humboldt, 1767-1835）が，同年に国王に宛てた直接請願『宗教音楽について』（Über geistliche Musik, 1809）である。これは，教会での歌唱を「公的なもの」と規定し，その性格を高尚なものにするために，国家の指導監督のもとで学校における音楽教育を変革しようという内容を持つものであった[18]。この請願は，その後のプロイセンにおける学校音楽教育の在り方を方向づけるものとなった。そして，学校音楽教育の改革は，特に教師教育の側から試みられることとなり，ツェラーとナトルプという，ともに1809年にプロイセンに招聘された2人の教育家により実際に着手されることとなったのである。

（2） ツェラーの音楽教育活動

ツェラーは，プロイセンに招聘される以前の1806年から1808年までスイスに滞在し，主としてチューリッヒのノルマルインスティトゥート（Normal-Institut：模範教育施設）において教員養成に携わり[19]，スイス滞在中の1807年11月から1808年2月まで，ペスタロッチのイヴェルドンの学園にも滞在したという経歴を持つ教育家である。

1809年にプロイセンに招聘されたツェラーは，ケーニヒスベルクのノルマルインスティトゥートのディレクトール（Direktor）として教員養成に携わるとともに，講習会を通して教師の再教育にも尽力した。ツェラーは，教師と聖職者のための講習会の開催を予定し，そのために5巻からなる教科書を作成した[20]。その教科書は，『プロイセンの国民教育の促進への寄与』（Beiträge zur Beförderung der preußischen Nationalerziehung）と題するもので，その第4巻として，『音楽の基礎』（Elemente der Musik, 1810）が出版された。

ツェラーは，『音楽の基礎』の序文において，これは1810年夏の180人の聖職者と教師を集めた

講習会で用いる教科書として作成したものであると述べている[21]。そしてその方法は，スイスで独創的なペスタロッチ主義に基づく音楽教育実践を行っていたプファイファーの方法を拠り所にしていることを明言している[22]。ツェラーは，スイス滞在中にプファイファーの学校も訪問し，そこでプファイファーの音楽教育実践を見聞し，さらに，自らプファイファーの方法に基づいた講習会をスイス滞在中に開催して成功を収めたとも述べている[23]。もっとも，プファイファーは，ツェラーに方法上の拠り所とされたことには，かなり当惑していたとされている[24]。また，ペスタロッチも，もともとツェラーに対しては好意を抱いておらず，「彼［ツェラー――引用者］は，一般にメトーデの下部に固執し，かつ形式主義に陥っています。」という批判を表明している[25]。したがって，ツェラーの方法が，真にペスタロッチ的かどうかということについては，検討の余地があることは確かである。

ツェラーの『音楽の基礎』は，リュトミークとメローディクを各々分離して学習させるという構成になっており，その点では，プファイファーの方法を踏襲していると言える。しかし，プファイファーは，拍子をとる練習（リュトミーク）を行った後で音程練習（メローディク）を行ったのであるが[26]，ツェラーは，この２つの要素の学習を並行して行うよう指示しており[27]，その点でプファイファーの実践，『唱歌教育論』との決定的な相違がみられる[28]。だが，『音楽の基礎』は，要素の学習が強調され，問答教授が厳格に適用されていることからみて，やはり基本的にはペスタロッチ主義の教本の流れを汲むものとみなして差し支えないと思われる。

ツェラーは，『音楽の基礎』の出版後，まもなくケーニヒスベルクのノルマルインスティトゥートのディレクトールの地位を退いているため[29]，その方法は，必ずしも広く普及したとは言い難い。しかし，ツェラーの活動は，1800年頃の個々の民間の教育家達によるペスタロッチのメトーデの音楽教育への適用の試みとは異なり，教育行政の側から，初めてペスタロッチ主義音楽教育の導入を組織的に推進しようとした点で，注目に値するものである。

３．ナトルプのペスタロッチ主義による学校音楽教育改革

（１） 唱歌講習会の実施

ツェラーと同じく1809年にプロイセンに招聘されたナトルプは，プロイセン政府より，高等宗務局顧問官（Oberkonsistorialrat）の肩書きを与えられ，首都ベルリンを含むクールマルク政庁の宗務・学務委員に任命された。これにより彼は，学校行政，特に初等教育の改革に中心的に携わる立場となった。

ナトルプは，低迷する民衆学校の音楽教育の状況を改善するために，特に学校教師の再教育を重視した。彼は，教師の継続教育の場で自発的な研修機会として「教師会」（Schullehrer-Konferenz-Gesellschaften）の設立を推進し，彼の尽力によって1810年代前半に大小さまざまな「教師会」が組織された。また，教師講習会（Schullehrer-Kurse）も各地で開催され，講習会の指導には，ナトルプが協力を要請した有能な聖職者や視学官，地方監督，カントル（Kantor；聖歌隊指導者兼唱歌教師）らがあたった[30]。ナトルプは，1809年以降，職務上から各地を巡回旅行し，学校を訪問するなどして各地の教師達と交流を持ち，多くの協力者を獲得したのであった[31]。教師講習会では，正書法や算数，文法などとともに唱歌の指導もなされ[32]，学校教師の音楽能力の不足を補う機会としても機能した。そこにおける唱歌の指導は，主として聖職者かカントルが担当した[33]が，そこで用いられた方法は，ネーゲリ，プファイファーの『唱歌教育論』がもととなるものであった[34]。

表　クールマルクにおける唱歌講習会（Gesangsbildungskurs）の開催（1811-1815年）

時期（年月日の順）	指　導　者	参加人数
11. 12. 16～12. 1. 2	Sup. Abel, Kt. Heinecke	20
12. 3. 4	Pr. Hirschberg, Kt. Ditfurth	11
12. 10.	Kt. Cromme	13
12. 12. 27～31	Pr. Wagner, Kt. Ditfurth	52
13. 5. 16	Pr. Frosch, Ob.-Ks.-Rat Natorp	16
13. 6.	Ob.-Ks.-Rat Natorp	23
13. 6.	Pr. Heyne, Ob.-Ks.-Rat Natorp	21
13. 10.	Kt. Schulz aus Züllichau	48
14. 8.	Pr. Segnitz	14
15. 3. 11～24	Pr. Richter, Kt. Grothe	不明
15. 10. 9～13	Pr. Richter, Kt. Grothe	6

出典：Wienecke, Friedrich. "Die Einführung der Pestalozzischen Methode in die Schulen der Kurmark (1809-16)," *Zeitschrift für Geschichte der Erziehung und des Unterrichts,* 5. Jg., 1915, S. 198-201（クールマルクにおける教師会の設立・教師講習会の開催一覧表）：この一覧表より，唱歌講習会の開催時期，指導者，参加人数のみ抜粋し，年代順に並べかえたものである［作成：関口］。

（略語）Sup.＝Superintendent＝地方監督
Kt.＝Kantor＝カントル　　Pr.＝Prediger＝説教師
Ob.-Ks.-Rat＝Oberkonsistorialrat＝高等宗務局顧問官

さらには唱歌だけの講習会も開催された（クールマルクにおける唱歌講習会 Gesangsbildungskurs の開催状況についての詳細は，〈表〉を参照）。〈表〉の通り唱歌講習会は，1811年から1815年までの4年間で11回，計40日余りも開催され，のべ200人を超える教師達が参加した。また，ナトルプ自身も，唱歌講習会に限って3度，直接指導しており[35]，彼が唱歌講習会を非常に重視していたことがうかがえる。ナトルプは，自身の『手引き』が出版される1813年以前には，講習会の準備として，ネーゲリ，プファイファーの『唱歌教育論』とツェラーの『音楽の基礎』の研究を勧めていた[36]。特に『唱歌教育論』については，クールマルク政庁の官報のなかでも強く推薦し，その導入と普及に関する詳細な報告を著している[37]。講習会終了後には，参加者達に講習会の内容に基づいて，独自の手引きを立案することを求めた。そして唱歌教授において特に成果を上げた教師達には，彼らの方法について報告書を作成させ，それを官報に掲載して公にすることを通してその方法を広めている[38]。このようにナトルプは，講習会の指導者から講習会に参加した教師達へ，さらに講習会に参加した教師達から講習会に参加しなかった教師達へと唱歌教授のメトーデが広められ，ペスタロッチ主義による民衆学校の音楽教育改革が促進するような政策を推進したのであった。

（2）『手引き』の概要とその特質

唱歌講習会とともに，ナトルプがペスタロッチ主義による民衆学校の音楽教育改革を促進させるために行ったもう一つのことが，『手引き』の作成である。

1813年に第1巻の初版が出版されたナトルプの『手引き』は，明らかに，ネーゲリ，プファイファーの『唱歌教育論』の構成や方法を継承している。すなわち『手引き』は，『唱歌教育論』と同様，音楽の要素をリュトミーク，メローディク，

ディナーミクの3つとみなし，まずリズムの練習から，続いてメロディー，ディナーミクの練習へと進める。各要素の練習においても，まず易しい課題から少しずつ難易度を上げて段階的に難しい課題へと進ませるなど，まさに，『唱歌教育論』の体系的な方法を踏襲したと言える。

しかし，両者の間で決定的に異なることもある。それは，『唱歌教育論』では，リュトミークから各要素の練習をまず，最も高度な課題まで徹底的に行わせた後で次の要素の学習に入るのであるが，『手引き』は，まず第1巻で簡単な各要素の練習をさせてそれぞれを結合し，より高度な課題は第2巻で行わせるというように，各要素をそれぞれ簡単な課題と高度な課題とに分けて取り扱っているところである。具体的には，第1巻では，リュトミークは四分音符と四分休符だけ，メローディクは，ほとんどがC-durの練習で，最後にそれ以外の長調の音階を提示するところまで，ディナーミクでは，ppからffまでの強弱の五段階とcresc.，dim.までである。それ以外については，例えば，二分音符や八分音符，臨時記号や短調，アクセントの練習などは，第2巻で扱う課題となっている[39]。これにより，『唱歌教育論』よりもずっと早期に実際の歌に導くことができるようになっている。実際に，すでに第一巻の終わりのほうには，四分音符と四分休符だけを用い，臨時記号等がいっさい現れないごく簡単なコラールが掲載されており[40]，『手引き』は，ペスタロッチ主義の方法を基礎にしつつも，コラールの習得という民衆学校での唱歌教授の現実的目標にもぴったりと合致したものであったと言えるであろう。そして『手引き』は，唱歌講習会とタイアップする形で，ナトルプのペスタロッチ主義による学校音楽教育改革の中核をなし，冒頭に述べたような数千部という普及につながったものと思われる[41]。

なお，ナトルプのこの『手引き』は，ネーゲリ，プファイファーの『唱歌教育論』などとともに，ヴュルテンベルクの学校規則（1823年）に採用されている[42]。

（3）『手引き』出版直後のドイツにおける唱歌教本の出版とナトルプの影響

『手引き』の出版は，ドイツの他の教育家達にも刺激を与えたようである。例えば，コッホ（Johann Friedrich Wilhelm Koch）の『唱歌論』（Gesanglehre, 1814）は，ナトルプの重視した数字譜をさらに有効な記譜法に仕上げたものといえる[43]。このコッホの教本は，ミュンスターの学校規則（1822年）に採用されている[44]。また，シュテファニ（Stephani）とムック（Muck）の『唱歌指導のための音楽壁掛け読本』（Musikalische Wandfibel zum Gesang-Unterrichte, 1815）は，いわゆる掛図であり，ネーゲリやナトルプに則した段階的進行を図示したものである[45]。

ナトルプの『手引き』出版直後に出された教本の特徴は，ネーゲリ，プファイファーの『唱歌教育論』の要素学習の方法を原則では維持しながらも，『手引き』と同様，その方法がかなりの程度簡略化されていることである。また，リュトミークよりもメローディクを重視する傾向も強くなっているといえる。

4．19世紀初頭のドイツにおけるペスタロッチ主義音楽教育の受容

（1） ペスタロッチ主義音楽教育の受容への布石

ネーゲリ，プファイファーの『唱歌教育論』が出版された直後の1810年代に，ドイツにペスロッチ主義音楽教育が受容されたまず第一の要因として，すでに1800年前後，つまりネーゲリ，プファイファーの『唱歌教育論』の出版よりもはるかに前から，ドイツのあちこちで，ホルスティヒやリントナーなど，民間の教育家，学校教師達によるペスタロッチのメトーデを音楽教育に応用させた試みがあったことを挙げることができるであろう。プロイセン教育改革期以前から，民間レベルでは

あっても，ペスタロッチのメトーデを音楽教育に応用させる試みがドイツ各地で見られたことが，プロイセン教育改革期にペスタロッチ主義音楽教育が受容される土壌を作る役割を果たしたとみなすことができる。

（2）　プロイセン教育改革とペスタロッチ主義音楽教育

プロイセン教育改革期に，ツェラーやナトルプなど，教育改革に直接的に携わった教育家達が，音楽を重視して教育行政の側から公にペスタロッチ主義による学校音楽教育の改革を推し進めたことが，1810年代というきわめて早い時期にドイツにペスタロッチ主義音楽教育が受容された最も大きな要因となったと言えよう。しかし，彼らが改革を推進できた背景には，プロイセン教育改革の理念そのものも，少なからぬ関係を持っていたのではないかと思われる。

プロイセン教育改革は，あえて一言で述べるなら，18世紀的な身分制に合った職業的教育に代え，「一般的人間陶冶」(allgemeine Menschenbildung) の理念に依拠した単線型学校教育制度の創設を企図したものであると言って差し支えないであろう。身分という枠にとらわれない人間は，個々人として自己の内的諸力を発達させねばならず，そのための「基礎教育」を担うものとして初等教育が位置づけられた[46]。個々人としての自己の内的諸力の発達，基礎教育の重視というプロイセン政府の方針は，人間の諸能力の調和的発達をめざしたペスタロッチの基礎教育のメトーデと合致する要素があったと言えよう。また，プロイセン教育改革は，身分制社会を打破し，国民国家への転換をめざす国民教育を推進していたが，そのなかで音楽は，公式礼拝との密接な結び付きにおいてとらえられ，民衆に対するその教育的効用が着目された。フンボルトは，先述の『宗教音楽について』のなかで，「音楽は，たとえ下層の民衆階級であっても感性と心情に深く作用することができる」[47]とか，「音楽以上に純粋に，力強く，容易に最下層の民衆階級にまで芸術の享受を行き渡らせるものがあるであろうか」[48]と述べるなど，音楽には，下層の民衆にまで有効な教育的作用を及ぼす力があるとしている。さらにフンボルトは，国家のあらゆる階級を人間として，社会の偶然の区別なく一つにまとめることを礼拝の本来の目的とし，その際に音楽は，国民の下層階級と上層階級とを自然に結び付けるものとなりうるとして，公式礼拝での歌唱の向上を国民教育的な課題と位置づけている。そしてその課題は，「正しい学校の形成」によってのみ可能になるとしている[49]。こうしたフンボルトの音楽に対する意味づけは，改めて学校音楽教育の重要性を再確認させるものとなったといえるであろう。

よって，ツェラーやナトルプらがペスタロッチ主義による学校音楽教育改革を推進できたのは，プロイセン教育改革自体がペスタロッチ主義の教授法の受容を進めていたこととともに，上述のような，フンボルトに代表される民衆教育や国民教育における音楽の重要性の認識が，強く後押ししていたという面もあったからであると考えられる。

（3）　プロイセン教育改革期以降のドイツのペスタロッチ主義音楽教育とアメリカへの影響

プロイセン教育改革は，ウィーン体制による保守主義の揺り戻しによって，1819年に完成したいわゆる「ジューフェルン法案」が結局法制化されないまま挫折したといわれているが，ペスタロッチ主義による音楽教育の方法は，ナトルプの影響を受けたヘンチェル (Ernst Jurius Hentschel, 1804-1875) らによって，少しずつ形を変えながらも受け継がれてゆく。ナトルプ自身も，プロイセンから離れた後も，ミュンスター，ゾーストで教育行政，教員養成等に携わり，音楽教育にも関わり続けている[50]。

ところで，ドイツで出されたペスタロッチ主義の教本のなかで，アメリカの音楽教育に大きな影

響を及ぼしたという点で忘れてはならないのが，キューブラー（G. F. Kübler）の『学校における唱歌指導の手引き』（Anleitung zum Gesang-Unterrichte in Schulen, 1826）である。すでに1820年代以降，アメリカのウッドブリッジ（William Chaning Woodbridge, 1794-1845）がスイス，ドイツを訪れて，ペスタロッチ主義の学校における教育実践を視察しており，アメリカにおいてもペスタロッチ主義への関心が高まっていたが，ローウェル・メーソン（Lowell Mason, 1792-1872）による『ボストン音楽アカデミー手引書』（Manual of the Boston Academy of Music, 1834）は，このキューブラーの教本を基礎としており，これによって，ペスタロッチ主義音楽教育がアメリカに導入される一つの重要な契機となったのである。キューブラーの教本は，短調や和声が早期に導入されてはいるものの，各々の音楽要素を分離して扱い，段階教授法や問答教授もとっており，明らかにペスタロッチ主義の方法に依拠するものである[51]。アメリカにペスタロッチ主義音楽教育が導入されたことは，周知の通り，我が国の学校教育における音楽教育の導入へとつながることを意味しており，我が国の学校音楽教育との関連性という点においても，ドイツにおけるペスタロッチ主義音楽教育の受容は，きわめて重要であると言えるであろう。

おわりに

本稿では，ドイツにおけるペスタロッチ主義音楽教育の受容の経緯をたどりながら，なぜ，1810年代というきわめて早い時期にドイツにペスタロッチ主義音楽教育が受容されたのか，その要因について考察した。その最も大きな要因は，ツェラーや，特にナトルプが，学校教師達に影響力のある公職の立場から，ペスタロッチ主義による学校音楽教育改革を推進したことであろう。また，民衆教育や国民教育に音楽が重要であるとするプロイセン教育改革の精神も，ペスタロッチ主義音楽教育の受容を後押ししていたと言えよう。さらに，プロイセン教育改革期以前の1800年前後からドイツのあちこちで，ペスタロッチのメトーデを音楽教育に応用する試みが行われていたことも，プロイセン教育改革期にペスタロッチ主義音楽教育が受容される一つの重要な素地となったとみなされるであろう。

今後は，スイスにおけるペスタロッチ主義音楽教育の受容とドイツのそれとを比較することを通して，19世紀前半のドイツ語圏におけるペスタロッチ主義音楽教育の受容過程をさらに多角的に考察したい。

註および引用文献

1) 筆者は，これまで“Gesangbildungslehre”を『唱歌教授法』と訳してきたが，本稿より，『唱歌教育論』と訳す。
2) Natorp, Bernhard Christoph Ludwig. *Anleitung zur Unterweisung im Singen für Lehrer in Volksschulen*（以下，この文献は，*Anleitung* と略称）., I. Leitfaden für den ersten Cursus, Essen und Duisburg, 1818 [1813[1]], S. VII.
3) Schneider, Dirk. *Bernhard Christoph Ludwig Natorp (1774 - 1846): Sein Beitrag zur Reform des westfälischen Volksschul - und Lehrerbildungswesens in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts.*, Frankfurt, 1996, S. 48.
4) 筆者は，別稿において，スイスにおけるペスタロッチ主義音楽教育の受容について論じている。参照：拙稿「19世紀前期カントン・チューリッヒ（スイス）の学校教育におけるペスタロッチ主義音楽教育の受容——H. G. ネーゲリ『学校唱歌集』（1833）の分析を通して——」『音楽教育学』（日本音楽教育学会）第29巻第1号，1999年，1-16頁。
5) Seyffarth, L. W. *Pestalozzi in Preußen. Vortrag gehalten auf der Liegnitzer Gau = Lehrer-versammlung in Bunzlau, den 2. Juni 1894.*, Liegnitz, 1894.

Thiele, Gunnar. *Die Organisation des Volksschul- und Seminarwesens in Preußen 1809-1819. Mit besonderer Berücksichtigung der Wirksamkeit Ludwig Natorps.*, Leipzig, 1912.
Wienecke, Friedrich. "Die Einführung der Pestalozzischen Methode in die Schulen der Kurmark (1809-16)", *Zeitschrift für Geschichte der Erziehung und des Unterrichts,* 5. Jg., 1915, S. 168-201.

6) 大崎功雄『プロイセン教育改革研究序説』多賀出版，1993年。

7) 例えば，ドイツ音楽教育史の先行研究としてはきわめて著名なシプケ（Max Schipke）やシューネマン（Georg Schünemann, 1884-1945）などでも，『唱歌教育論』やナトルプの『手引き』等，ペスタロッチ主義の唱歌教本の概要とその音楽的特質についての考察が中心であり，プロイセン教育改革とその音楽教育との関連については，ほとんど着目されていないのである。
Vgl. Schipke, Max. *Der deutschen Schulgesang von Johann Adam Hiller bis zu den Falkschen Allgemeinen Bestimmungen (1775-1875).*, Berlin, 1913.
Schünemann, Georg. *Geschichte der deutschen Schulmusik.,* 2Bde., Köln, 1931 [1928[1]].

8) Weyer, Reinhold. *Bernhard Christoph Ludwig Natorp : Ein Wegbereiter der Musikdidaktik in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts.,* Frankfurt, 1995, S. 202.

9) Natorp, *Über den Gesang in den Kirchen der Protestanten.,* Essen und Duisburg, 1817, S. 139.

10) Schünemann, a. a. O., S. 288.

11) Weyer, a. a. O., S. 203.

12) Schünemann, a. a. O., S. 288.

13) Horstig, "Vorschläge zur besserer Einrichtung der Singschulen in Deutschland," *Allgemeine musikalische Zeitung* (以下，この雑誌は，*A. m. Z.* と略称), 1798, Sp. 166-174, 183-189, 197-201 ; 1799, Sp. 214-220.

14) Klein, C. B. "Vorschläge zur Verbesserung der gewöhnlichen Singschulen in Deutschland," *A. m. Z.,* 1799, Sp. 467-471.

15) Lindner, Friedrich Wilhelm. "Ueber den Gesang in der Bürgerschule zu Leipzig," *A. m. Z.,* 1805, Sp. 147-158, 161-173.

16) Weber, Johann Rudorf. *Theoretisch-praktische Gesanglehre.,* 1. Heft, Bern und Zürich, 1849, S. 79-80.

17) Lindner, "Was ist bis jetzt für die Gesangs-Bildung geschehen? Historisch - kritisch beantwortet," *A. m. Z.,* 1811, Sp. 5.

18) Humboldt, Wilhelm von. "Über geistliche Musik," 1809. これは，次の文献に全文が収録されている。Vgl. Nolte, Eckhard. *Lehrpläne und Lichtlinien für den schulischen Musikunterricht in Deutschland vom Beginn des* 19. *Jahrhunderts bis in die Gegenwart. Eine Dokumentation.,* Mainz, 1975, S. 31-33.

19) 1806年から1808年にかけてのスイスにおけるツェラーの活動については，以下の文献に詳しい。Vgl. Bauer, Annedore. *Die Pädagogik Carl August Zellers (1774 - 1846).,* Frankfurt, 1989, S. 200-250.

20) 当初は，8巻からなる教科書の作成を計画していたようである。この辺の経緯については，大崎氏が詳述している。
参照：大崎，前掲書，542-545頁。

21) Zeller, Carl August. *Elemente der Musik.,* Königsberg, 1810, S. VII.

22) Ebenda., S. VI-VII.

23) Ebenda., S. VI.

24) Schattner, Hermann Joseph. *Volksbildung durch Musikerziehung ; Leben und Wirken Hans Georg Nägelis.,* Otterbach-Kaiserslautern, 1960, S. 91.

25) Morf, Heinrich. *Zur Biographie Pestalozzi's.,* 4. Tl., 1966 [1889[1]], S. 190.

26) Löbmann, Hugo. *Die Gesangbildungslehre nach Pestalozzischen Grundsätzen von Michael Traugott Pfeiffer und Hans Georg Nägeli in ihrem Zusammenhange mit der Ästhetik, der Geschichte der Pädagogik und der Musik.,* Leipzig, 1908, S. 56. なお，プファイファーは，ペスタロッチのブルクドルフ時代，1801年から

2年間，ペスタロッチの学園に滞在し，そのメトーデを学んだ音楽教師である。1805年にカントン・アールガウのレンツブルクに学校を開き，ペスタロッチ主義に基づく独創的な実践を行っていた。プファイファーについては，次の文献に詳しい。Vgl. Keller, J. *Michael Traugott Pfeiffer, der Musiker, Dichter und Erzieher.*, Frauenfeld, 1898.

27) Zeller, a. a. O., S. IX.

28) なお，ツェラーの『音楽の基礎』には，『唱歌教育論』における音楽の三要素の一つであるディナーミクの練習が欠けている。しかし，もともとプファイファーの実践において，ディナーミクの練習が行われたという報告は残されていない［Vgl. Löbmann, a. a. O., S. 56］。よって，『唱歌教育論』にディナーミクを音楽の要素として加えたのはネーゲリであると推察される。したがって，ツェラーの『音楽の基礎』にディナーミクの練習が欠けていることは，『唱歌教育論』との決定的な相違ではあるが，むしろプファイファーの実践とは合致していたとみなしてよいであろう。

29) ツェラーがケーニヒスベルクのノルマルインスティトゥートのディレクトールの地位を退いた原因，およびその経緯については，大崎氏が詳細な考察を行っている。
参照：大崎，前掲書，615-657頁。

30) 1810年代前半のクールマルクにおける教師会の設立状況，教師講習会の開催時期，指導者，参加人数等の詳細については，ヴィーネケが整理している。Vgl. Wienecke, a. a. O., S. 198-201.（クールマルクにおける教師会の設立・教師講習会開催一覧表［1810-1815］）

31) Ebenda., S. 178.

32) Vgl. Ebenda., S. 180-188.

33) 講習会における唱歌の指導者として特に重要な役割を果たしたのは，カントルのシュルツ（C. Schulz）である。彼は，ツェラーやネーゲリとも面識があり［Schünemann, a. a. O., S. 313］，『基礎的方法による唱歌論の手引き』（Leitfaden bei der Gesanglehre nach der Elementarmethode, 1812）というペスタロッチ主義に則った唱歌教本も作成している。

34) Wienecke, a. a. O., S. 188.

35) ヴィーネケの整理した一覧表によると，ナトルプが教師講習会において直接指導したのは，3回の唱歌講習会だけである［Ebenda., S. 198-201］。また，ヴェイヤーによると，ナトルプのスケジュール表には，3回の唱歌講習会を担当したことが記されているとしており［Weyer, a. a. O., S. 228］，ヴィーネケの整理したところと一致する。

36) Ebenda., S. 227.

37) Ebenda.

38) Ebenda., S. 228-229.

39) 『手引き』と『唱歌教育論』との相違は，その他にも，『手引き』では量的にも質的にも，明らかにリュトミークよりもメローディクに比重が置かれているとか，数字譜をきわめて重視しているなどをあげることができるが，本稿は，両者の比較自体を目的にしているわけではないので，ここでは，これ以上の詳細な比較は避けたい。だが，上述のような相違は，ネーゲリとナトルプとの音楽観，音楽教育観の関係性の問題にも関わる重要な問題であるため，いずれ稿を改めて論じたい。

40) Natorp, *Anleitung,* I., S. 72-73, 81, 88, 90-91.

41) 『手引き』が，唱歌集ではなく，学校教師に対する指導マニュアルであることを考慮すれば，5,000～7,000部という数字は，当時にあってはたいへんな普及を示していると言える。生徒が使用する唱歌集であれば，当然，必要とされる部数が多くなるため，多くの販売部数が見込める。例えば，1832年にスイスのカントン・チューリッヒで必修教材に認定されたネーゲリの『学校唱歌集』（Schulgesangbuch）は，出版から1年半の間に約11,000部が販売されたと言われている［Schipke, a. a. O., S. 115］。しかし，その一方で，『手引き』と同じ学校教師に対する指導マニュアルであった，ネーゲリ，プファイファーの『唱歌教育論』は，再版されることなく，かなりの在庫を残してしまったとされている［Schattner, a. a. O., S. 119］。

42) Schmidt, Harro. *Musikerziehung und*

Musikwissenschaft im 19. Jahrhundert., Hamburg, 1979, S. 47.

43) Vgl. Koch, Johann Friedrich Wilhelm. *Gesanglehre.*, Magdeburg, 1814.

44) Schmidt, a. a. O., S. 47.

45) Schünemann, a. a. O., S. 320.

46) Vgl. Menze, Clemens. *Die Bildungsreform Wilhelm von Humboldts.*, Hannover, 1975, S. 9-58.

47) Humboldt, "Über geistliche Musik," IN: Nolte, a. a. O., S. 33.

48) Ebenda.

49) Ebenda., S. 31-33. フンボルトがプロイセン教育改革を代表する人物の一人であることは間違いないが，プロイセン教育改革期には，フンボルトとも異なるさまざまな思想を持つ教育家が存在したことも事実である。にもかかわらず，ここでプロイセン教育改革の音楽の理解をフンボルトに代表させたのは，彼の『宗教音楽について』が，公的な立場からプロイセンの音楽の在り方についてまとまって述べた唯一のものだからであり，ドイツ音楽教育史におけるその重要性による。

50) ナトルプのミュンスターでの活動については，以下の文献を参照されたい。Schneider, a. a. O., S. 33-37. また，ゾーストの教師ゼミナールにおけるナトルプの音楽教員養成の活動とその後世への影響に関しては，次の文献に詳しい。Vgl. Vogelsänger, Siegfried. *Musik im Lehrerseminar zu Soest (1826 - 1926): Lehrerbildung unter Einfluß von B. C. L. Natorp. Ein Beitrag zur Musikpädagogik des 19. Jahrhunderts.*, Hagen, 1973.

51) Vgl. Kübler, G.F. *Anleitung zum Gesang-Unterrichte in Schulen.*, Stuttgart, 1826.